

Book Review

月刊「歯界展望」別冊 子どもの歯科臨床 UPDATE Q&A でわかる! 対応・治療の最新情報

井上美津子・田中英一・藤岡万里 編著

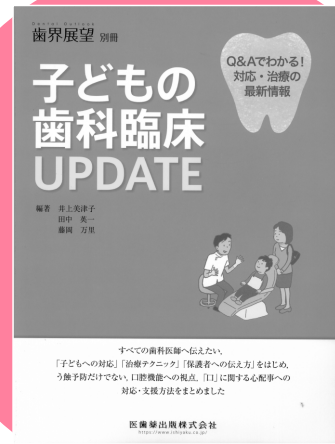


Reviewer

鈴木駿介 Shunsuke Suzuki

(神奈川県・鈴木歯科医院、
一般社団法人神奈川県歯科医師会 会長)

A4 判変、オールカラー、192 頁
定価 (本体 5,800 円+税)
医歯薬出版刊



子どもの歯科臨床や保護者の対応に苦慮している歯科医師には、必携の本としてお勧めしたい一冊である。

近年、わが国は世界に例を見ないスピードで少子高齢化が進み、それに伴って子どもの歯科臨床を取りまく環境も大きく変化してきている。本書の著者らは、小児歯科の専門医や指導医として、長年大学において、あるいは開業しながら、子どもの治療はもちろんのこと、学生や小児歯科医を目指す人達の育成に携わってきた。彼らは長年にわたる活動のなかで、そうした変化を最も身近で感じ取り、折に触れ変化への対応を考え、実践してきた人達である。この本はその経験の集大成といえるもので、タイトルにあるように、子どもの歯科臨床に頑張っている歯科医師のために、現代に則した内容にアップデートされた本である。

子どもの歯科臨床において最も大きく変化したのは、う蝕の激減である。12 歳児の平均う蝕保有数は 1 本を切り、乳歯のう蝕有病者率は必ずしも低いとはいえないが、それでも平成 28 年度歯科疾患実態調査によれば、5

歳児のう蝕保有者の割合は 23 年前と比較して半減している。一方で、80 歳で 20 本以上の歯を保有する者の割合は 50% を超えた。このような歯科界を取りまく社会の変化は、歯科医療提供体制にも影響を及ぼし、歯科臨床は「歯の形態回復」から「口腔機能の回復」へと大きくシフトしてきた。

子どもの歯科臨床においても同様で、最近では、生涯を通じて健康な生活を維持するためには、子どものときからの口腔の健康管理や機能管理が不可欠であるとの認識が定着してきている。本書は、治療のための診断や導入方法、治療テクニックなどのほか、子どもや保護者との信頼構築やさまざまな疑問に答えるため必要な知識、あるいは、今社会的問題となっている虐待やアレルギーなどへの対応についても多くのページを割いている。

近年、核家族化や共働きが進むなか、子どもを取りまく環境は IT の普及によっても大きく変化してきた。SNS などによって、育児や子どもの口腔の健康管理などについての知識を得ている保護者が増加しており、なかに

は、誤った情報を信じている親もいる。また、最近では患者さんの権利意識が強く、歯科治療を巡ってのトラブルは年々増加の一途を辿っている。そして、トラブルの多くが説明の不備によることは、さまざまな事例によって明らかになっている。今の時代、われわれ歯科医療に携わる者にとって、患者や保護者に対する説明責任はより重要度を増している。

本書は、子どもの口腔の健康に関心の高い保護者への説明の仕方や、さまざまな訴えに応えるために必要な知識が満載されており、信頼されるかかりつけ歯科医を目指す歯科医師には、ぜひ手元に置いてほしい本である。また、本書は Q&A の形式をとっているので読みやすく、特に「ここがポイント」は実在的を射た内容で、よく纏められており、私のような高齢者にもよく理解できる。本書には、今の時代ならではの情報も収録されているので、一般開業歯科医はもちろんのこと、小児歯科認定医や専門医の先生方にもお勧めしたい。